

粘膜に主症状を呈した水疱性類天疱瘡における初回の抗 BP180 抗体価の平均は 39.1 であった。治療としては局所ステロイド治療および口腔衛生指導を行い、全例とも経過良好であった。

【考察】 口腔粘膜に主症状を呈した自己免疫性水疱症の診断において血清検体での ELISA 法は有用な検査法であった。口腔内の病態とこれらの抗体価の推移は必ずしも一致しない時期も認められた。また、これらは口腔粘膜病変が主症状であっても経過中に皮膚病変を生じ、症状の増悪がみられることもあるため早期に皮膚科との連携が重要であると考えられた。

【結語】 当科における過去 7 年間の口腔粘膜に生じた自己免疫性水疱症について臨床的検討を行った。

P1-9.

化学放射線療法を施行する口腔癌患者における EPA 配合栄養製剤の有用性

(社会人大学院三年・口腔外科学)

○河野 通秀

(口腔外科学)

渡辺 正人、虻川 東嗣、安田 卓史
豊田 潤、長谷川 温、里見 貴史
近津 大地

【目的】 口腔癌に対する化学放射線療法は、著しい口腔粘膜炎が頻発し摂食障害による体重減少や低栄養状態を生じる。今回われわれは、口腔癌患者に対する化学放射線療法を行う際に、治療前より EPA 配合栄養製剤（プロシユア[®]、abbott Japan）を用いた栄養学的介入を行い、その有用性を検討した。

【対象および方法】 2009 年 10 月から 2010 年 3 月まで、東京医科大学病院口腔外科で 1 次治療として化学放射線療法を施行した口腔癌患者 5 例を対象とした。方法は、治療開始 1 週間前から治療終了 1 週間後まで栄養補助として EPA 配合栄養製剤を 2 パック/日（600 ml、EPA 2 g）を摂取させ、治療前後の体重や血液データの変動を検討した。対照は、2007 年から 2009 年までに当科で 1 次治療として術前化学放射線療法を施行した口腔癌患者 13 例とした。

【結果】 栄養製剤投与 5 例では、総コレステロールの有意な上昇と総リンパ球数に有意な低下を認めた

（ $P < 0.05$ ）。対照群では、体重・総タンパク・アルブミン・総コレステロール・総リンパ球数の有意な低下と、好中球数に有意な上昇を認めた（ $P < 0.05$ ）。

【結論】 EPA 配合栄養製剤を用いた口腔癌患者に対す治療前からの栄養学的介入は、化学放射線療法における栄養指標の維持に貢献することが示唆された。

P1-10.

白血球細胞株におけるコリン取り込み機構の解明とその役割

(医学部三年)

○犬塚 将之、藤田 陽介

(薬理学)

稲津 正人

コリンは、全ての動物細胞にとって必要な必須栄養素であり、細胞膜の構成成分であるフォスファチジルコリンやスフィンゴミエリンの前駆体として利用されている。一方、神経系においては、神経伝達物質であるアセチルコリンの前駆体として重要な役割を担っている。最近、癌細胞においてコリンシグナル系の活性増加が観察され、細胞増殖との関連性について注目されている。また、PET などの画像診断において ¹¹C- コリンや ¹⁸F- コリンが用いられるようになり、コリンの癌細胞への集積性の高さが確認されている。従って、癌細胞はコリンを積極的に取り込み細胞増殖に利用していることが推察される。しかしながら、白血球細胞におけるコリン取り込み機構については全く解明されていない。本研究では、白血球細胞株の HL-60 および Jurkat 細胞を用いて、コリン取り込み機構の特徴を明らかにし、コリン輸送に関与するトランスポーターの分子の実体を解明することを目的とした。HL-60 および Jurkat 細胞は、時間依存性、濃度依存性および Na⁺ 非依存性のコリン取り込み機構を有していた。これらのコリン取り込みは、細胞外 pH の低下および有機陽イオン系化合物により抑制された。また、コリン取り込みを阻害する有機陽イオン系薬物は、細胞増殖を抑制した。更に、両細胞ともに choline transporter-like protein 1 (CTL1) の mRNA が高発現していた。アセチルコリン合成酵素の mRNA 発現は、Jurkat 細胞にのみ検出され、細胞内において [³H] コ